第6次綾部市総合計画 計画案を審議会に諮問

8月21日の会議で、第6次総合計画の原案について山崎善也市長から諮問を受ける上原会長＝左

市は8月21日、西町三丁目の市民センター（あやべ・日東精工アリーナ）で市振興計画審議会を開き、第6次綾部市総合計画の原案について諮問しました。市は1月中旬に同審議会から答申を受け、市議会の3月定例会に諮って同計画を決定する予定です。

市の方向性を決める計画

計画案は序論と基本構想、基本計画で構成。序論には本市の現状や第5次総合計画の成果、課題などを記しています。次の基本構想では、市の将来都市像やそれを実現するための目標、施策の主旨を記載。基本計画では分野ごとに施策の具体的な目標を示し、達成に向けた計画や目標値などを定めます。

分野ごとに案を審議

同審議会は、各分野の団体代表者と公募の市民2人を含む委員34人で構成しています。8月21日に行った1回目の会議では、前綾部市副市長の上原直人さんを同審議会の会長に選出しました。「過去の計画策定に関わってきた。夢のあるすばらしい計画となるよう審議していただきたい」とあいさつした上原会長。その後、会長職務代理者に、市自治会連合会長の髙倉正明さんを指名しました。

同審議会は今後、諮問された計画案の内容を、分野ごとに審議します。12月末までに会議を5回行い、令和3年1月中旬に答申する予定です。

意見交換会などを実施

市は今回策定する計画に、市民の本市に対する意見や思いを反映させるため、昨年9月に府立綾部高等学校の生徒と意見交換会＝**写真①**＝を実施。生徒は「住み続けたい、帰ってきたい、関わり続けたい10年後のあやべとは」をテーマに、市の「良いところ」「気になるところ」などについて意見を出し合いました。

また、同年11月に青野町のものづくり交流館で行った「未来まちづくり市民ワークショップ」＝**写真②**＝には、市民など55人が参加。「担い手不足で地域コミュニティが衰退していく」「綾部の魅力や歴史、文化などを市民が認識できていない」など、本市の問題点や課題などについて、活発に議論を交わしました。

市民などに意識調査

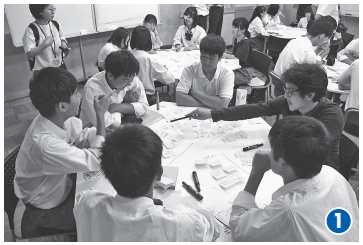
市は、市民や中学生、市外在住の市内企業従業員などを対象に、アンケートも実施しました。その結果、市の魅力として「自然が豊かなまち」の割合が高く、一方で年齢が低いほど市への愛着や定住思考が低くなる傾向がみられました＝**上表**。

市は、こういった調査や市民の声をもとに、計画の原案を作成しました。アンケート結果や市民ワークショップの内容などは、市ホームページに掲載しています。ぜひご覧ください。

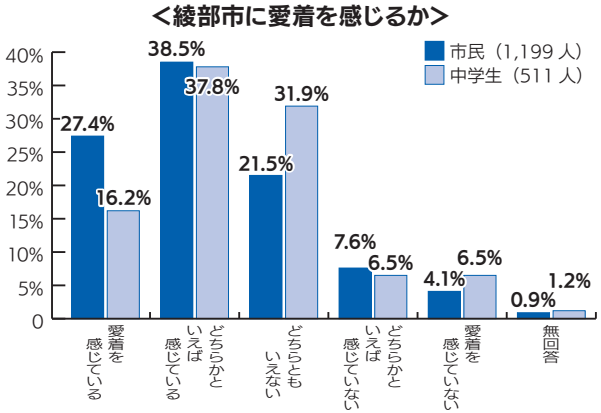
総合計画とは…

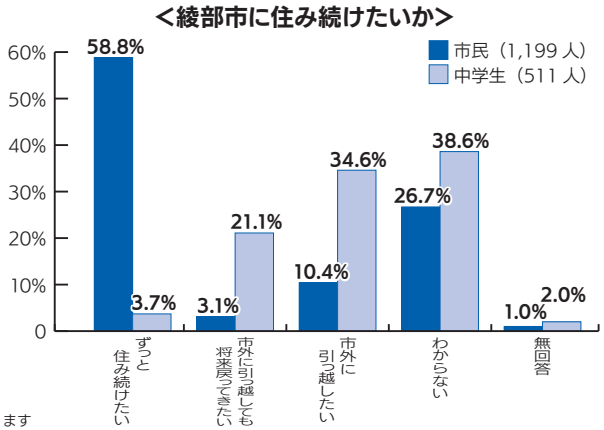
市のまちづくりの基本的な方向性を定めるものです。第5次総合計画の期間が本年度末で終了するため、令和3年度から10年間の計画を、本年度中に策定します。

1回目の会議で、市が計画案を説明。同審議会は今後の審議の運営などを決めました


❶市と包括連携協定を結んでいる京都産業大学の学生とともに、市の魅力について語り合いました

❷「綾部の魅力」や「改善提案」などを付せんに書き出して、討論するワークショップ





市に「愛着を感じている」「どちらかといえば感じている」を合わせた割合は、市民と中学生のどちらも過半数を超えています。しかし、「綾部市に住み続けたいか」の問いには、中学生は「ずっと住み続けたい」の割合が低く、「市外に引っ越したい」の割合が高くなっています。

※数値処理の関係で、合計が100にならない場合があります

第6次総合計画（案）へのパブリックコメントを募集

市は計画策定に当たり、広く市民の皆さんからの意見を募集します。

期間　10月16日(金)午後5時まで

閲覧　市役所行政情報コーナー（東庁舎1階）、企画政策課（市役所本庁2階）、市ホームページ

応募対象者

①市内に住所を有する人　②市内に事務所か事業所を有する個人や法人、その他の団体　③市内に所在する事務所か事業所に勤務する人　④市内に所在する学校に在学する人　⑤市税の納税義務を有する人

提出方法

指定の様式で直接窓口に持参するか郵便、ファクス、メールで企画政策課へ

＜提出先・問い合わせ＞

同課　☎(42)4215、F(42)4905
メール　kikakuseisaku@city.ayabe.lg.jp

移住立国あやべ
IJURIKKOKU AYABE

定住希望者が増加
空き家活用にご協力を

近年、都市での生活を見直し、地方での定住を希望する人が増えています。市は、市民や自治会、企業などオールあやべで移住について取り組んでいく「移住立国プロジェクト」を展開しています。昨年度の定住者は20世帯39人。さらに本年は、9月8日時点で、昨年の同時期を上回る14世帯34人の定住を支援しました。

田園回帰の傾向強まる

新型コロナウイルス感染症による人口密度の高い都市圏での生活の不安からか、移住への関心がさらに高まっていると言われています。実際に、本市の定住サポート総合窓口への相談は、6月は230件、7月は309件、8月は340件と増加傾向です。

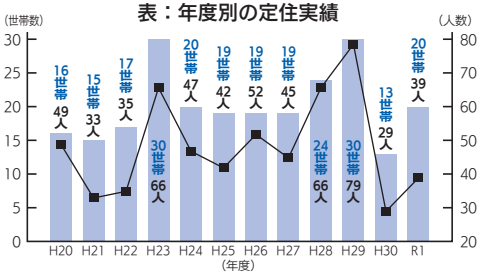
物件の雰囲気がより伝わるよう、動画で撮影

市は、こうした流れを受け、遠隔でも定住相談ができる仕組みを構築。間もなく、動画での物件紹介やオンライン会議システム「Zoom（ズーム）」による案内を始めます。また、市内宿泊施設を利用した府外在住の定住相談者に、宿泊費の一部を補助する制度も開始。9月8日までに24人が利用しました。

空き家は約1000戸

現在、本市の窓口には、約1000世帯が定住希望者として登録しています。一方、紹介できる空き家は常時70戸程度。希望者に対して、物件数が少ないことが課題です。

市は昨年度、市自治会連合会と共同で、平成28年度以来3年ぶりの「空き家調査」を実施しました。調査によると、市内全地区の空き家は1015戸（平成28年度比255戸増）。そのうち「すぐにでも住めそう」は463戸（同128戸増）、「修理をすれば住めそう」は372戸（同81戸増）で、82・3パーセントを占めています。

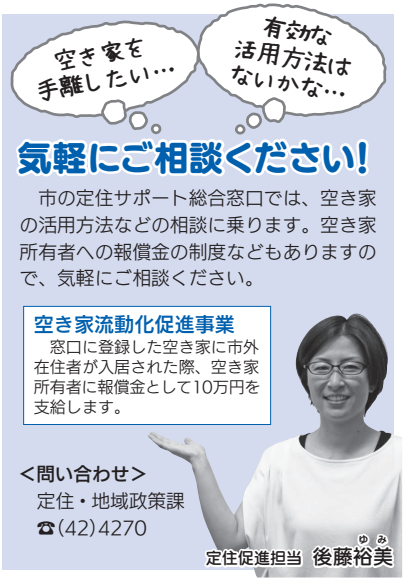


市は今月、これらの空き家所有者に、今後の活用方法等を問うアンケートを実施。売買や賃貸を検討している所有者には、定住サポート総合窓口への空き家登録などを呼び掛けます（空き家登録は綾部・中筋地区を除く）。定住促進には、空き家の流動化が大きな鍵。ご協力をお願いします。

累計約600人が定住

市は平成20年度、全国に先駆けて「定住サポート総合窓口」を設置しました。空き家紹介だけではなく、就農・就職相談や地域の人との顔合わせへの同行など、ワンストップで本市への定住を支援しています。

また▽定住支援住宅の設置▽市内の宅地建物取引業者と連携した、安心して取り引きできる仕組みづくり▽「綾部市住みたくなるまち定住促進条例」制定―などの施策を展開。昨年度末までに242世帯582人が窓口を通じて定住しました＝表。市は今後も、田園回帰の流れをチャンスと捉え、定住促進に積極的に取り組みます。



気軽にご相談ください！

市の定住サポート総合窓口では、空き家の活用方法などの相談に乗ります。空き家所有者への報償金の制度などもありますので、気軽にご相談ください。

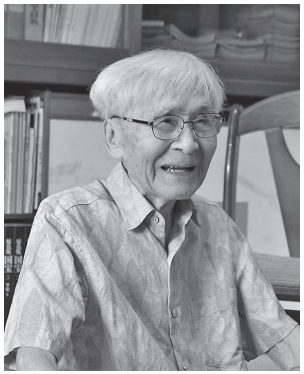
空き家流動化促進事業
窓口に登録した空き家に市外在住者が入居された際、空き家所有者に報償金として10万円を支給します。

定住促進担当　後藤裕美（ゆみ）

＜問い合わせ＞
定住・地域政策課
☎(42)4270

いつまでもお元気で
白寿の祝い

「百」の字から「一」を取ると「白」の字になることから、99歳は「白寿」と呼ばれています。市は、本年度に白寿を迎える人へ記念品などを贈呈し、長寿をお祝いしました。


▲教諭だった渡邉忠夫さん（中筋町）は、書道師範として87歳まで書道教室を開かれていました

▲80歳まで仕事をしていたという河内綾子さん（中ノ町三丁目）は「何でも食べる。お肉が好き」と笑顔

「好き嫌いなく、3食しっかり食べることが元気の秘訣かもしれない」と山崎保さん（故屋岡町）▶

対象は33人

敬老の日を前に、山崎善也市長は9月4日、白寿を迎える3人のお宅を訪問。記念品を手渡しました。本年度の対象は大正10年4月2日から大正11年4月1日までに生まれた人。男性6人、女性27人の計33人で、次の皆さんです（敬称略・誕生日順・掲載了解者のみ掲載）。

村上コト（西町二丁目）▽四方ことえ（睦寄町）▽牧野フミヱ（下八田町）▽堀井たりゑ（味方町）▽河内綾子（中ノ町三丁目）▽出野まち江（上延町）▽河田三郎兵衛（仁和町）▽梅原信男（神宮寺町）▽松宮マモル（相生町）▽村尾初枝（七百石町）▽新宮久野（味方町）▽渡邉静子（七百石町）▽四方英夫（多田町）▽四方静子（天神町）▽大島キクエ（栗町）▽四方壽子（梅迫町）▽渡邉忠夫（中筋町）▽出原勇（岡町）▽左瀧キミエ（位田町）▽黒田鈴子（位田町）▽小林きみゑ（青野町）▽野瀬井ふさ江（上杉町）▽山崎保（故屋岡町）

歴史は繰り返す？

今年の夏は散々だ、と皆が口を揃える。旅行や帰省もままならず、花火大会やコンサート等のイベントは軒並み中止。全てはコロナ禍に起因するのだが、これがビジネスに影響し赤字決算や事業存続の危機に追い込まれるという、更なる事態の深刻化も案じられる。

誰もが経験したことのない状況に、政府の対応も右往左往。ワクチンや治療薬の開発までは、〝Stay！〟や〝Go！〟の試行錯誤に諦め感さえ漂う。しかしながら人類の歴史をみると疫病との闘いの繰り返しであり、医学は感染症の対策や治療の探求により発展してきたことに気付く。

古代メソポタミアで疫病は四災厄のひとつに数えられ、中国でも甲骨文字で疫病に係る文言が確認されている。日本でも古来、流行（はや）り病の鎮静を祈る神事が行われてきた。そして中世においてはペストや天然痘、近代ではスペイン風邪、そして現代においてもAIDS（エイズ）など鑑（かんがみ）みると、今回の新型コロナもその再現であることが理解できよう。

更に興味深いのは、疫病が戦争など国境を超える人の移動によって蔓延（まん）し、後の世界秩序に於（お）けるヘゲモニー（主導的地位）も、スペインからイギリス、そしてアメリカへと遷（うつ）っていったという事実である。果たしてポストコロナでも同じ歴史は繰り返すのか。中国の台頭にその兆しを見てとるのは穿（うが）ち過ぎか…。

山崎善也（綾部市長）

コロナ禍の大地震想定
市防災訓練を実施

市は8月31日、防災の日（9月1日）を前に西町三丁目の市民センター（あやべ・日東精工アリーナ）で、防災訓練を実施しました。いつ発生するか分からない自然災害に備え、職員の防災体制の確立や応急対策の習熟を図り、災害に強いまちを目指します。

1感染の疑いがある避難者は保健所に連絡し、搬送します　2感染症対策として避難所の外で検温や消毒を実施　3避難所の職員は防護服などを着用し、定期的にドアノブなどを消毒します　4専用スペースが確保できない場合は、簡易テントを設置します

感染症対策で規模縮小

今回の訓練は、全国で拡大している新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、参加人数を減らすなど規模を縮小し、感染リスクの少ない訓練を実施しました。

当日は市職員や消防本部、各地区自治会連合会の関係者など57人が参加。訓練は、全国的に感染症がまん延している中で発生した、大規模地震を想定しました。

感染予防に防護服など

訓練は午後1時30分から開始し、市災害対策本部の設置・運用訓練や避難情報伝達訓練、避難所の開設・運営訓練を実施。避難所の訓練では、感染予防に配慮して本年7月に改定した、避難所運営マニュアルに基づき▽避難者の問診・検温▽定期的な消毒▽避難スペースの確保▽保健師による各避難所での巡回健康相談―などを行いました。

避難所の職員は感染予防のため防護服やマスク、フェースシールド、ゴム手袋などを着用。避難者に発熱などの体調不良が確認されたときは、分離した専用スペースに誘導し、症状や行動歴を確認します。また、避難所内で感染の疑いがある患者が発生したことを想定し、緊急搬送訓練も行いました＝**写真①**。

防災資材を展示

今回の訓練は、昨年10月に新しく完成した市民センターで実施しました。同センターには災害時などに利用する、マンホールトイレや「かまど」に転用できるベンチを常設しています。訓練では、災害時の使用方法を展示して確認しました。

市は今回の訓練を踏まえ、今後も市民や関係機関と連携して防災対策を進めます。

▲同センター前のマンホールには、簡易トイレを設置できます

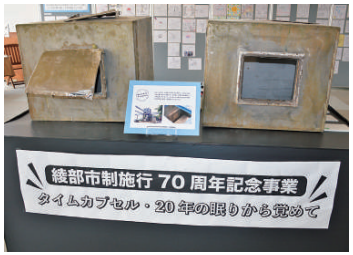
◀▼同センター前のベンチは災害時、かまどや収納箱として使用可能

20年の時を超え ～そして次の20年へ～

市制施行70周年市民実行委員会（今村博樹委員長）は8月15日、上野町の藤山公園で、平成12（2000）年に市制施行50周年事業として埋設したタイムカプセルを開封しました。タイムカプセルには、当時の市内小・中学生や新成人の寄せ書き、雑誌や新聞などが入っており、収納品は15日から18日まで、西町一丁目のI・Tビルで展示されました。

展示では、20年後に配達される手紙を書く「タイムレター」のコーナーを設置。今後、市内小・中学生の寄せ書きなどとともに、再び埋設する予定です。

20年後が楽しみ！



平和を願い黙とう

地球市民の集い実行委員会（委員長、山崎善也・綾部市長）は終戦の日の8月15日、上野町の藤山山頂で綾部市民平和祈願の集いを開催しました。40回の節目となる同集いには、市民約130人が参加。世界連邦都市宣言と市民憲章の唱和の後、平和の鐘が鳴り響く中で、戦没者の冥福と世界平和を願い黙とうしました。

森の恵みを収穫

水源の里・古屋（渡邉和重代表）と古屋でがんばろう会（長谷川陽介代表）は9月5日、特産品づくりに欠かせないトチの実を収穫しました。作業には、市内外からボランティア25人が参加。この日の収穫は約60キログラムでした。ボランティアも参加してのトチの実拾いは、9月に全8回実施予定です。